

中村健教授退任によせて

## 神戸市総合教育センター研修育成係 教育相談指導室との関わり

廣岡千絵

### 1. 教育相談指導室の事業について

神戸市総合教育センター研修育成係教育相談指導室（以下、「本室」と表す）は、現在「児童生徒支援」、「保護者支援」、「学校支援」の視点から様々な事業を展開している。具体的には、電話相談や面接相談、保護者対象講演会、事例検討会、教員対象の課題研修講座などである。そのうち電話相談は、昨年度は4年ぶりに1000件を下回り803件であった。相談内容は、多い件数順に「不登校」（198件）、「学校・教職員との関係」（152件）、「家庭・子育て」（112件）となっており、相談者の75%が母親からの相談であった。面接相談は、親子並行面接で昨年度は1360件であった。来談者の主訴は、多い順に「不登校」（1140件）、「発達障害等」（80件）、「家庭・子育て」（51件）となっている。

その中でも特長ある取組として「育てる教育相談」推進事業がある。これは、児童生徒によるいじめや不登校などの不適応行動への予防的な取組を推進するものである。本室では、前『生徒指導提要』（文部科学省、2010）に掲載されている「育てる（発達促進的・開発的な）教育相談」の考え方を神戸市に広げ、実践につなげていきたいと考えている。（図1）

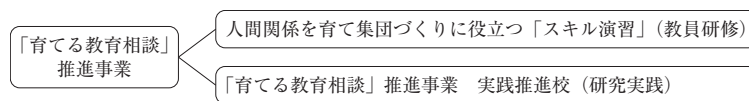


図1 教育相談指導室「育てる教育相談」推進事業

なお、上記の「人間関係を育て集団づくりに役立つ『スキル演習』（以下、「スキル演習」と表す）は、1回3時間の教員研修であり、『育てる教育相談』推進事業 実践推進校（以下、「実践推進校」と表す）は、教員が児童生徒を対象に「育てる教育相談」の様々な手法（ソーシャルスキルトレーニングやアサーショントレーニング、アンガーマネジメント等）を実践し、個々の児童生徒の社会性を育む事業である。本事業は、「第3期神戸市教育振興基本計画～明日につなげる新・こうべ教育プラン～」の重点事業8-⑥「いじめや不登校、友人関係などさまざまな悩みに応じる教育相談の推進」に掲載されている。

## 2. 「スキル演習」について

「スキル演習」は2013年度から始め、その講師には、専門家である大学教員を7名招聘している。本研修は、講師が事務局担当者と共に希望した学校へ出向いて「育てる教育相談」の理論とその手法の研修を行うアクティブ研修であり、今年度で10年目を迎えた。令和4年度末時点の実施校数（のべ数）は、小学校101校（62%）、中学校59校（72%）であり、本室では神戸市立小学校・中学校の全校実施を目指している。

「スキル演習」実施後は、各学校が事後アンケートを記入し提出する。アンケート項目は、「スキル演習の感想」として「ア. 非常に良かった, イ. 良かった, ウ. 普通, エ. あまり良くなかった」の4件法で回答し、またその理由も記入するようにしている。コロナ禍のため2020年度以降は実施校が減少しているが、2013年度から2019年度までの事後アンケート（表1）からは、「非常に良かった」、「良かった」を合わせてほぼ100%であることから、教員にとって「スキル演習」は評価が高い研修であると分かる。

中村教授には2015年度から「スキル演習」の講師をしていただいております。今年度までの8年間で小学校7校、中学校21校を担当していただいた。中村教授の研修に対するアンケート結果は、「非常に良かった」が平均すると88%を超えている。その回答の理由には「童心に戻れて教職員間の距離が縮まったように思う。」「グループワークやペアワークを活用した参加体験型の研修であったため良かった。」などがあり、研修を通して各校の同僚性の向上にも寄与していただいていることがみえる。

さらに、そのアンケートの項目には「実際に授業等に取り入れ、実践しましたか。」という項目があり、「実践した」と答えた学校の取組も多い。ここでは具体例として、以下に2つあげる。

A 小学校：学級での席替えの時に、隣に座っていた子へ「いいところみつけ」をしたカードを渡してから新しい席に移動した。

B 中学校：グループエンカウターの「他己紹介」、「人間関係チェック」、「アサーショントレーニング」を実践することで、生徒が良い意味で自己主張するようになり、少しずつ周囲のことを考えて行動できるようになってきた。

「スキル演習」は、学校にとって1回3時間の夏季研修であるが、中村教授による研修がその後の教育実践へとつながっていることは、本室として本当にありがたいことである。

表1 「スキル演習」事後アンケート結果（%）

|              | 2013年 | 2014年 | 2015年 | 2016年 | 2017年 | 2018年 | 2019年 |
|--------------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| ア, 非常に良かった   | 80.0  | 76.7  | 86.7  | 83.7  | 80.6  | 90.0  | 90.0  |
| イ, 良かった      | 20.0  | 23.3  | 13.3  | 13.3  | 19.4  | 10.0  | 6.0   |
| ウ, 普通        | 0     | 0     | 0     | 3.0   | 0     | 0     | 3.0   |
| エ, あまり良くなかった | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     |
| 計            | 100   | 100   | 100   | 100   | 100   | 100   | 100   |

### 3. 「実践推進校」について

「スキル演習」に引き続き2014年度からは実践推進校を募集し、「スキル演習」の拡大版としての事業を始めた。Ⅰ期（2014・2015年度）～Ⅲ期（2018・2019年度）までそれぞれ2年間ずつ実践推進校を指定し、指定校において「育てる教育相談」について理解を深める職員研修や「育てる教育相談」に関わる研究授業などの実践を重ねた。Ⅰ期はC小学校が全校でスキル教育を実施し、学習の準備や進め方について学習指導のスタンダードを作成した。Ⅱ期は、D中学校が校区内での小中連携や「チーム学校」としての研究推進及び、教科授業における「育てる教育相談」の実践を行い、Ⅲ期は、E中学校が校区内での小中連携に加えて課題のある児童生徒を対象にしたケース会議を行うという、Ⅰ期・Ⅱ期の実践推進校よりも発展させた取組が実現した。これらⅠ期～Ⅲ期における実践により、児童が成功体験を積み「新しいスキルを身に付けたい。」という意欲が見られるようになったり、授業中に4人班活動を取り入れたことにより学び合いが促進され男子生徒と女子生徒の隔たりを感じられなくなったり、活動のある授業を繰り返すことで生徒同士の会話が増え、学年生徒が全体的に明るい雰囲気になったというような児童生徒の変容を見ることができた。このⅢ期から現在まで、中村教授に専門的支援をしていただいている。

Ⅲ期のE中学校2年間の研究実践において、教員に実施した事後アンケートからは、以下のように生徒と教員のどちらにも変容が見られたことが分かった。

- ・実施後の変化はよく分からないが、実習中の子供たちの様子を見て生き生きとしている様子や仲間づくりでのラポールを伺うことができ、意外な場面を感じることができる機会となった事は良かった。
- ・職員の変化が生徒たちにつながったと思う。
- ・生徒理解を前提に生徒と接するようになったと感じる。
- ・先生間での情報共有が密になったように感じた。



これらの成果を示す一方で、担当教員への負担感が課題であるという指摘も見られたことや、本事業を神戸市内の多くの学校へ広げたいという思いから2020年度から本事業は形を変え、実践推進校は1年間に3校指定となった。各実践推進校には年間3回、計9時間の支援を行っている。具体的な内容は、授業観察、校内研究会におけるコンサルテーション、ケース会議における専門的助言などである。

### 4. 保護者対象教育相談講演会について

本室では、2014年から保護者を対象とした講演会を1年間に3回実施している。テーマは、「不登校」、「発達障害」、「いじめ」、「ネット依存」、「親子のかかわり」など、その時々に応じて保護者の方に求められていると考えられるものを選び、そのテーマの講師として相応しい方々に

依頼している。実施場所は、神戸市総合教育センター10階ホール（定員数：400名）で、毎回、多くの保護者の方に参加していただいている。最近のコロナ禍では、中止や入場者数を定員の半数に制限するなど形を変えての実施をしてきたが、今年度は定員数100%での実施ができています。

中村教授には、2019年6月5日（水）に「不登校状況をそうとらえ、どのように過ごすのか～子の心、親の心、そして学校」という演題で講演をしていただいた。本講演会では、中村教授が不登校と向き合ってきたご経験や親としてのご経験を踏まえたお話しをしていただいた。参加者のアンケート結果は、「とても良かった」、「よかった」を合わせると97.4%という高評価であった。参加者のアンケートには、

- ・全てのお話がとても分かりやすく、子供のことについて理解する視点を勉強させていただきました。ありがとうございました。
- ・非常に良いお話でした。今日、こちらに来て本当に良かったです。息子の良いところを認め、感謝の気持ちを伝えたいと思いました。悪いところばかり目に入りますが、見方を変えないといけないと痛感しました。ありがとうございました。

などの言葉が並んだ。このように参加者の心に響く内容で、参加者自身は楽しく話を聞くことができ、さらには参加者の意識の変容を促したことが分かる。そして、アンケートの最後には「また先生のお話を聞きたいです」と記入された方が多かった。

## 5. 終わりに

本室は、学校心理学でいう1次的援助サービスから3次的援助サービスまでを事業化し推進している。特に「育てる教育相談」推進事業は、実践推進校において教員の同僚性が高まり、授業改善や児童生徒の学級内雰囲気向上、学習意欲の育成などが認められている。今後も「教育行政」と「神戸市立小・中学校」と「大学」という三者の協働により、「育てる教育相談」の考え方やその手法を神戸市に広く定着させ、不登校や友人関係などさまざまな悩みに応じる教育相談の推進を図っていくつもりである。本室では現状を維持するだけでなく、今後はさらに関係機関として学校や保護者、児童生徒のニーズに合う事業を展開していきたいと考えている。